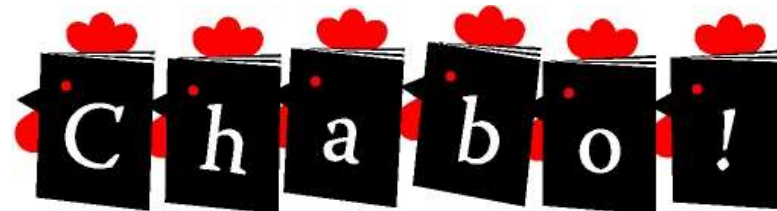


2. 2012年ハイライト

- 2-1 東日本大震災 緊急・復興支援
- 2-2 世界7ヶ国での「自立の支援」

日本を含む世界8か国で778,607人の人びとへ「自立」をサポートする事業を行いました。

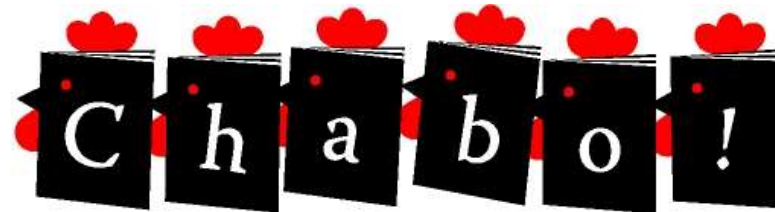


2-1 東日本大震災 緊急・復興支援

- 宮城県仙台市・石巻市とその周辺地域

震災から1年。広大なエリアが被災し、壊滅的なダメージを受けた東日本大震災の被災地では、復旧が進む一方で、未だ支援の手が届かないエリアが存在するなど、支援の格差が顕著となりました。それぞれのニーズと復興のステージにあわせたきめ細やかな支援が必要となりました。

一方で、復興へ向けた地域再生のシナリオが、少しずつ現地の人びとの手で描かれた年でした。「ずっと住みたい街、石巻へー。」2012年、JENは、震災を経験した地域の方々みずから創る地域の未来の実現を支えるプログラムを目指しました。



宮城県石巻市とその近辺

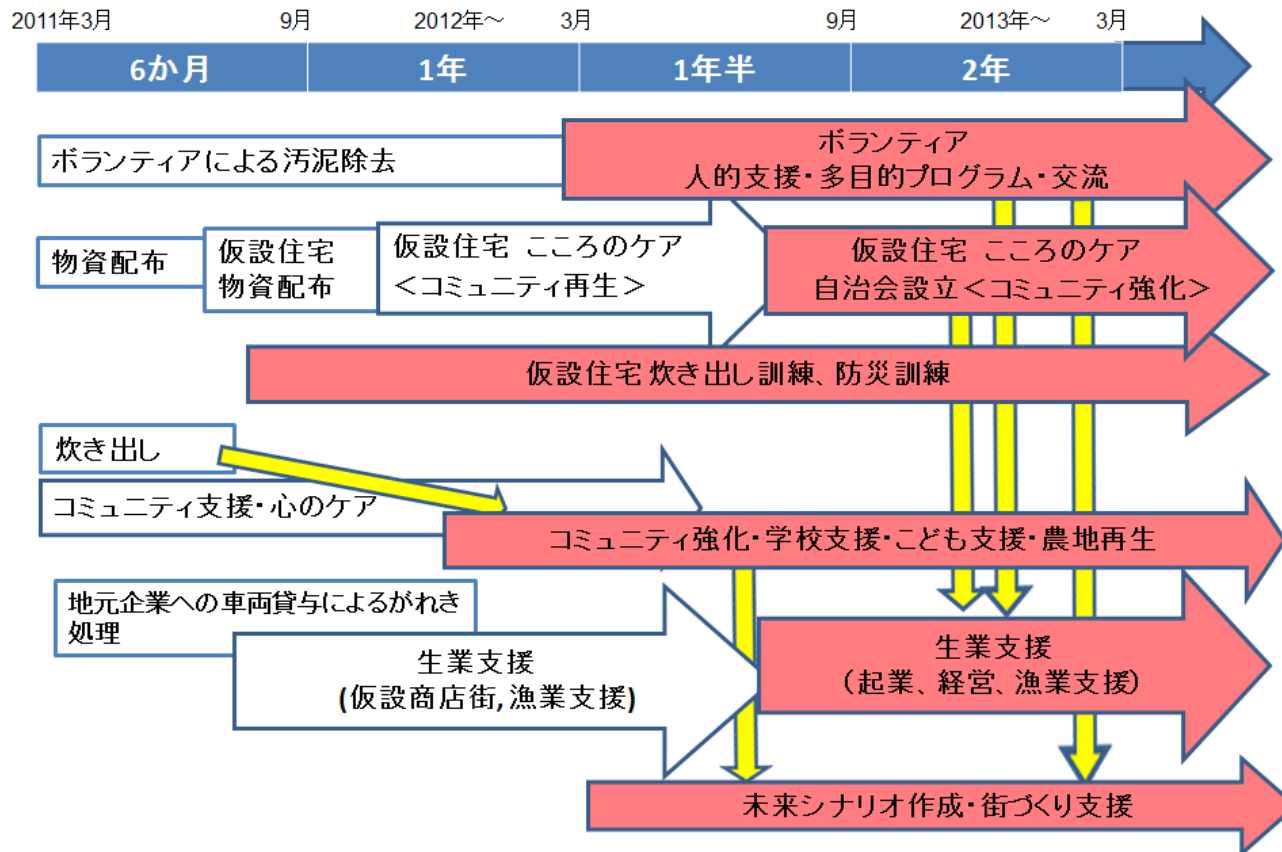


一市六町が合併し、東西35Km、南北40Kmに広がる宮城県第2の都市・石巻市では、都市型と漁村型の異なるライフスタイルが存在します。都市部に比べて半島の復旧は遅く、生活背景の違いがもたらす復興への課題も様々に異なります。2012年、JENでは、復旧の遅れが目立つ地域での支援を続けるとともに、住民の方々自らが地域の復興プランを描き、実現するためのサポートを行いました。



緊急から復興へ。緊急支援から復興支援への移行が進み始めた2012年は、物資配布などの緊急支援や瓦礫の除去や流された設備・機材の復旧のニーズが減る一方で、コミュニティの再生や産業の活性化など、地域が復興するために中長期的に取り組むべき課題が見えてきた年でした。それは、過疎化や高齢化など、東北地方が長らく抱えてきた問題への挑戦でもありました。

かつてない巨大災害からの復興支援は、地域の方とともに、その道筋を描き、実現に向けて挑戦する活動となりました。



【図】JENの東北プログラムの移行図。

「震災前より、もっと、いい街へ。ずっと暮らしたい街へ。」
地域の方が目指すものは、震災からの復興の先にある新しい東北でした。
2012年、地域の方々とともに、JENの事業は以下の方針で実施しました。

地域の再生

コミュニティ支援

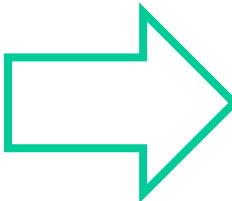
- 仮設住宅コミュニティ形成
- 未来シナリオワークショップによるコミュニティ再生
- 「コミュニティカフェ」運営を通じたコミュニティの再構築
- 子ども支援
 - 遺児・孤児への支援
 - ダンス教室
 - サッカー交流
 - 学校支援
 - 学習支援 など

生業支援

- 牡鹿半島での漁業支援
- 漁協女性部の収入創出支援
- 手作りクラフト活動

ボランティア・交流事業

- ボランティア、企業研修
- 漁業体験プラン



暮らしやすい街
ずっと暮らしたい街

交流事業 ～「外」からの力を復興の力に

震災以降、東北には、復興を目指し、たくさんの人やモノが集まりました。外部との交流は東北の人びとを勇気付け、交流により生まれたアイデアはともに街を創る機運となり、復興のモチベーションとなりました。

「漁業の発展」より「外部との交流」 ～「東浜未来シナリオプロジェクト」

「漁業が発展して、収入が向上し、生活が楽になるといっただけでは、今後、高齢化や後継者の問題が出てくるという不安がある。それよりは、外部との交流をさらに発展させて、新しいことを開拓していきたい。」

（東浜ワークショップに参加した漁業従事者）

牡鹿半島の浜では、震災後、ボランティアが継続的に浜を訪問し活動してきたことで、復興のために、外部から人や情報を受け入れたいという機運が高まりました。

JENは、8月、牡鹿半島の東浜地区で、浜の未来を考えるワークショップ「東浜未来シナリオプロジェクト」を実施。ワークショップから、新しい企画が生まれました。2012年、JENはそのうちのひとつ「浜へ行こう！」の実現をサポートしました。



‘津波に遭って幸せってことはないけれども、
おかげで出会うはずのなかった人に会えた。
今まで話もしなかった地域の人と協力するようになった。
津波で失ったものはたくさんある。
でも、自分は、得たもののほうを見ていきたい’



12月、「東浜未来プロジェクト」から生まれたプログラム「浜へ行こう！」がスタートしました。

牡鹿半島には33の浜が存在します。漁業を営む漁師はほとんどが個人事業主であるため、震災以前は、地域の未来のために浜を超えて協力して働くことはありませんでした。

震災後、浜は変わりました。ボランティアが継続して浜へ訪れるようになるにつれ、新しい出会いや情報の流れができました。



「浜へ行こう！」は、牡鹿半島の5つの浜が協働して行う、漁業とボランティアが融合した交流プログラムです。ワークショップで決意した「発展のための交流」を実現するために、地域の住民みずからが実施しました。

2012年、さまざまな交流プログラム



伝統行事＋ボランティア



企業新人研修＋漁業支援ボランティア



街づくり＋ボランティア



学校清掃ボランティア＋交流



横浜市・石巻市サッカー交流会

「暮らしやすい街・ずっと暮らしたい街」を実現するためには、地域経済の活性化、個々の生業の活性化により十分な収入があることが必要です。

JENでは、中でも最も優先順位の高い取り組みとして、昨年から引き続き、石巻の主要産業である漁業支援や養殖支援を行いました。人的支援(ボランティア派遣)を行いながら、販路開拓や加工品開発、生計の回復を行いつつ新しいビジネスの機会を創る活動を行いました。

また、漁業の壊滅的なダメージにより職を失ったのは、漁業に直接従事する男性だけではありません。仕事を通じて女性が生き生きと働くことができるアイデアの実現をサポートしました。



【写真】

漁網編みプロジェクトでできた網でシャコ漁を再開。

【漁網プロジェクト】



昨年に続き、全国で品薄だった漁網の資材を供給し、浜の人たち自身で編んだ漁網をいったんJENが買い取ります。その後、各漁協支部を通じて漁師さんたちに公平に分配されます。全国からのボランティアも参加し、4つの浜で4000反もの漁網が編まれました。それにより、漁網を編む人とそれを使って漁を行う人、それぞれに収入をもたらすことができます。



【漁具の提供】



<女性起業・販促スキル支援>



かき小屋「浜友」オープン

「浜で遊んで友達になろう」という意味が込められた牡蠣小屋「浜友(はまゆう)」が牡鹿半島・佐須浜にオープン。住民とJENとの話し合いとワークショップの結果、生まれました。食堂としてだけでなく、もの作り教室や裁縫、パソコン教室、カフェとしてなど、浜の人びとが集うコミュニティスペースとして活用されています。



宮城県漁協女性部
活動資金調達のためにアクセサリーの商品開発を実施(1,000人対象、2013年発売)



販売スキルアップ研修



起業支援イベント





コミュニティ支援



JENは、震災直後から、仮設住宅や在宅避難をされている方々の支援を通じて、コミュニティ支援を行ってきました。「ずっと暮らしたい街」を実現するためには、衣食住などの「暮らしやすい」環境整備に比べ、コミュニティ自体が活力を取り戻す必要があります。

6,890世帯が131箇所 に点在し、見知らぬ人同士が隣り合わせで住む仮設住宅では、地域の絆が失われています。地域が活力を取り戻しながら、自治機能を強化し、子どもも大人も安心して暮らせる環境をつくるために、地域の将来をともに考えるワークショップや各種アクティビティを実施しました。

一方、甚大な被害を受けた沿岸部では、人口が急減しています。
JENでは、今も地域に残り、生活の再建にとりくんでいる方々をサポートしています。

JENのコミュニティ支援のゴール

● 課題解決に必要な支え合いの再生・形成

自治会形成

- コミュニティとしての問題解決能力の強化
- 復興の推進力となるコミュニティ単位でのアクティビティ
- 新しい街をつくるための将来ビジョン作成のサポート

● 地域で生きていくための心の支え合い

心のケア

- 「心のケア」ワークショップ&イベントの実施
- 日々の生活や生計回復のサポート
- 引きこもり、孤独感、PTSDの軽減

仮設住宅で。新しい仲間と、地域とともに。

仮設住宅の生活が抱える課題を住民が協同で解決し、地域の絆を強めることでよりよい未来を目指すために、JENでは住民が参加できるアクティビティや自治会作りを行ってきました。2012年、それらの活動が活性化し、住民主導の動きへと発展しました。



ものづくり工房「AMIS工房」

もの作りを通じてライフスタイルが変わっていくことは、「復興」よりも「発展」につながると感じ、「発展」は女性が担える役割だと思っています。

(AMIS工房・リーダーの赤坂智子さん)

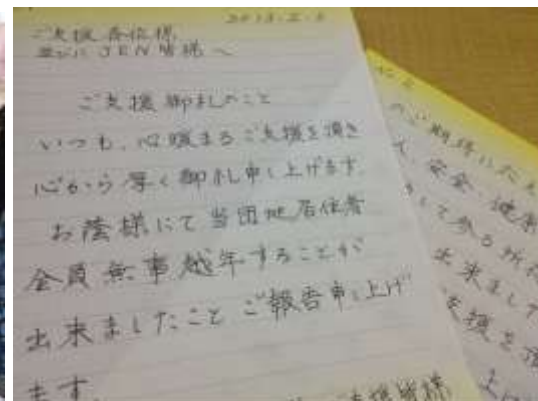
南境第七仮設団地では、集会所で実施してきたJENの心のケアプログラムのひとつ、ものづくりワークショップが「AMIS工房」というグループに発展しました。「AMIS」はフランス語で「仲間」という意味。月5回の集まりに出るために時間をやりくりしているお母さんたちは「仲間に会うためにライフスタイルが変わった」といいます。元気のない仮設住宅の仲間たちとも励ましあいながら、「震災」じゃなくても売れる製品」を目指して販路を開拓しています。



自治会設立運営をサポート



自治会とともに防災・炊き出し訓練



被災した地域で。もう一度、もっと、よい地域に。

上釜地区中屋敷は、震災前は1,000世帯(2,800人)が暮らしていましたが、津波で約240人が亡くなりました。その後、約450世帯が戻ってきましたが、世帯数は以前の半分以下となりました。震災直後、JENは、この地域のお宅の敷地をお借りし、炊き出しを行いました。そこはやがて、人が集まる場所になり、コミュニティ・カフェ「なかやしきっさ」となりました。

**「災害に強い街づくりをしなくてはいけないと思っています。
そのために、手作りのコミュニティを作りたい。みんな戻ってきてくれるといいんだけど。」**
「なかやしきっさ」を運営する中島産業(株)阿部貞男さんご夫妻

食べるものや着るものがなくて着の身着のままだったから、炊き出しに来てくれたことが嬉しかった。敷地や事務所を提供してあげた気持ちは全くなくて、助けられた、という気持ちが強かった。自然と人が集まってきて、炊き出しが終わったあとも、地域の人びとが集まってきた。

誰かと話していると気がまぎれた。
一人暮らしの人は、多少具合が悪くても、来ると元気になるという人もいる。
今はみんなでものづくりをしている。お地藏さんを今は作っている。
地域でも全然知らなかった人たちが、震災のおかげで仲良くなったり知ることができた。
仮設に行ってる人たちが、上釜に帰ってきて、集まりを楽しみにして遊びに来てくれた。

集まる場所がないってことは、誰かとおしゃべりしたくてもできない。
「なかやしきっさ」は(2013年、市の制限区域のため)解体するが、これからの構想がある。
ものづくりで通ってきてくれるお年寄りがいる。その場を提供したい。
手作りのコミュニティを作りたい。新しくコミュニティハウスを作りたい。できれば早いうちに完成したい。



「なかやしきっさ」で
町内会の話合い

コミュニティ単位で子どもたちを取り巻く環境を改善しつつ、様々なステークホルダーと協働しながら、スポーツや地域活動などを通じて、子どもたちや地域の自立をサポートしました。



【パラリンピック金メダリスト国枝選手の小学校訪問】
石巻市で2番目に死亡・行方不明の児童が多く被害の大きかった釜小学校。国枝選手をお迎えするために事前に丁寧な準備ができたことは、子どもたちの感動と成長につながりました。

【「つながる花壇」プロジェクト】

門脇地区で、地域の小学校を卒業した生徒たちが花を植えるプロジェクトを始めました。「灰色になった街を花で彩りたい」という思いが地域全体に広がっています。JENでは、この活動に、全国からのボランティア、企業の皆さまのサポートを募る支援を行っています。



【石巻地区消防音楽隊への楽器支援】

30年以上の歴史を持つ消防音楽隊は、音楽を通じて広く住民に防火・防災意識を普及することを目的に地域のイベントで演奏を行ってきました。震災で隊員と楽器を失い、音楽活動の再開ができずにいた音楽隊へ、一般財団法人mudefのアーティストからのご支援で楽器の支援を行いました。